様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３１６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２２５７

研究課題名（和文）17世紀における武家歌人の交流と文芸活動について

研究課題名（英文）On the Interactions and Literary Activities of 17th Century Samurai Poets

研究代表者
松本　麻子（Matsumoto, Asako）

いわき明星大学・教養学部・准教授

研究者番号：７０７０８９９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、17世紀の武家歌人の和歌を通じた交流と、それぞれの文芸活動について明らかにすることを目的としたものである。3年間で、次のような成果が得られた。まず、17世紀の武家歌人は、堂上和歌の表現、特に後水尾院の和歌表現を用いて歌を詠んでおり、師事している歌人の所属している歌壇の好みが反映されていることが分かった。小笠原長勝・蜂須賀綱通・青山忠雄らは、指導者である飛鳥井雅章の特異な表現を用いていることも判明した。肥前島原松平文庫・宮城県図書館伊達文庫の歌書を調査すると、近世初期に歌書がまとめて書写された可能性を指摘できる。これらは、公家歌人の指導者を介して同時期に収集されたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have sought to clarify the literary activities carried out by 17th century poets of samurai, as well as the interactions which took place between them by way of the medium of Waka poetry.Samurai poets wrote their poetry using courtly forms of Waka, and in particular the form known as Gomizunooin. It was especially noticeable that the expressions typical of the Waka poetical circles the poets belonged to could be detected within their work. I have determined that these individuals utilized the poetical themes and forms of Waka expression which originate with the Utakai-Hajime conducted by their instructor, Asukai. Furthermore, through an examination of the samurai family book collections stored at Matsudaira-Bunko and Date-Bunko, I have uncovered the possibility that books of poetry may have been transcribed as collections in the early modern period. It is possible that these collections were put together with the assistance of courtly poets as instructors.

研究分野：日本文学

キーワード：中世文学　和歌　大名　飛鳥井　俳諧　連歌

１．研究開始当初の背景

2013 年度から 2014 年度にかけて遂行した研究課題「磐城平城主内藤義概の和歌文芸について」(研究活動スタート支援・課題番号 25884055)で、磐城平藩の藩主、内藤義概(1619～85 年)を調査した。その結果、俳諧作者「風虎」として著名な義概は、和歌においても近世初期を代表する武家歌人として評価されていたことが判明した。義概は、和歌関係の辞典類には立項されることのない「歌人」であるが、徳川光圀の命で編纂された『正木のかつら』(延宝二年〈1674〉成立、山本春正序)には 10 首、正徳元年(1711)に豊臣秀三によって撰ばれた『和歌視今集』には 13 首の和歌が入集している。

また、元禄二年(1689)に成立したと思しい『近代百人一首』(伊達文庫本他)、同年成立の『近代一人一首』、元禄四年成立の『一人一首』(刈谷図書館本)、同年成立の『若むらさき』など、義概没後まもなく成った撰集にその名を確認することができる。

義概の家集『左京大夫集』(内閣文庫本)や義概の主催した歌合などを調査した結果、義概は鍋島直能(1623～89 年、肥前小城藩藩主)・中山信治(1628～89 年、常陸松岡藩藩主)・細川行孝(1637～90 年、肥後宇土藩藩主)・中川久恒(1641～95 年、豊後岡藩藩主)・小笠原長勝(1646～82 年、豊前中津藩藩主)・田村宗永(建顕とも、1656～1708 年、陸奥岩沼藩藩主、後に一関藩藩主)ら、多くの大名と親しく接していたことがわかった。小笠原長勝の家集『内匠守長勝集』にも、義概へ送った和歌が記されている。彼らもまた『正木のかつら』『和歌視今集』や『近代百人一首』『近代一人一首』『刈谷本一人一首』などに撰ばれる近世初期を代表する武家歌人である。

彼らの歌会の様子は、たとえば岡本宗好なる人物の歌集『露底集』の詞書より確認できる。『露底集』によれば、宗好は田村宗永・中川久恒の邸宅で行われた歌会に参加し、義概の居住した磐城平藩の隣に位置する相馬中村藩藩主相馬昌胤(1661～1728 年)とも交流した。このような調査結果から、義概と同時代の大名が和歌を通じてどのような関係を結んでいたのか、という問題をさらに掘り下げて行く必要を感じた。

２．研究の目的

近世初期の武家歌人は、いずれも飛鳥井雅章・日野弘資といった堂上を代表する歌人に指導を受けている。義概の家集『左京大夫集』は後水尾院をはじめ飛鳥井雅章・烏丸資慶・日野弘資・中院通茂らの点を得た詠を中心にまとめられた集であり、鍋島直能や細川行孝は飛鳥井雅章に、中山信治・小笠原長勝・田村宗永は日野弘資に師事していた。もちろん大名が著名な堂上歌人に和歌の指導を受けることは、当然のことと言える。しかし、渡辺憲司氏は「大名と堂上歌壇―田村建顕を中心に―」(『近世堂上和歌論集』1989 年、明治書院)で田村宗永(建顕)と交流した武家について「田村建顕、毛利綱元、鍋島直條という同世代で同じ師を持ち詠歌に精進し文芸を好み、外様雄藩の弱小支藩大名という同じ環境にあったことは、大名と文芸の問題を論ずる時に注目すべきこと」と述べる。このことから、本研究も、義概の時代の「同世代」の大名が「詠歌に精進し」、飛鳥井雅章・日野弘資といった堂上歌人に指導を受け、互いに交流している、という点に着目して行いたい。まずは、内藤義概の時代、つまり 17 世紀の武家の交流のさまを、より具体的に示すのが本研究の目的である。

３．研究の方法

3 年間の研究期間内で、内藤義概の時代、つまり 17 世紀の武家の交流のさまを具体的

に示した。『正木のかつら』や『和歌視今集』、『若むらさき』などの撰集に重複して取り上げられる、歌人として知られた武家の家集の調査を行った。上野洋三氏は『元禄和歌史の基礎構築』（2003 年、岩波書店）で、17 世紀前後の撰集に見える武家歌人をまとめており、これを参考にした。内藤義概と交流のあった同時代の大名には、未調査の和歌資料が多くある。2015 年度には、先行研究がなされていない 17 世紀の大名の和歌資料の所在と内容の確認を中心に行った。

次に、確認した和歌資料のうち、重要なものを翻刻し紹介した。彼らがどのような歌会に参加したのか、堂上歌人の誰に指導を受けていたのか、をまとめ互いの接点を探ることを目的とした。義概と親しかった小笠原長勝の『内匠頭源長勝集』や、岡本宗好の家集『露底集』は、詞書が詳細で、大名家で行われた歌会の年次も記されている。他にも、武家歌人として知られ、中川久恒・相馬昌胤と親交があった堀田一輝の『無名御歌集』(宮城県図書館伊達文庫)にも、武家の関係を知ることのできる詳しい詞書が残されている。儒者として幕府に仕えた林鵞峰の日記『国史館日録』には、義概をはじめ、義概の娘を室とした小出英安、義概と親交のあった鍋島直能ら武家歌人の名前が頻出する。このような資料をもとに、研究期間の 2 年目には、武家歌人の交流のさまを明らかにした。

2017 年は、17 世紀の武家歌人たちの歌風について調査し、どのように和歌を学んでいたかについて研究を行った。義概と繋がりのあった武家歌人の指導者、飛鳥井雅章・日野弘資・中院通茂らの添削の内容について、資料を保存している機関にて書誌調査を行った。中院通茂の祖父通村の武家指導については、高梨素子『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』（2010 年、おうふう）に研究があるが、通茂や飛鳥井雅章・日野弘資の和歌指導については、まだ明らかにされていないことが多い。さらに、大名が教科書として用いた歌書についても考察した。たとえば、内藤義概の俳諧作品として『五百番自句合』（天理図書館綿屋文庫）がある。この作品には、句を詠む際に参考とした歌書の名前が記されている。『五百番自句合』は俳諧の自句合ではあるが、義概が所持していた歌書を知る上で参考になった。武家歌人についての情報が豊富な『国史館日録』で林鵞峰は、義概をはじめ、武家間での歌書の貸し借りの様子を詳しく記していた。このような資料をもとに研究期間の 3 年目には、武家歌人がどのように和歌を学んでいたのか、教科書として用いた歌書は何かという点を明らかにした。

４．研究成果

本研究は、和歌を詠むことで培われた大名の交流関係を明らかにして、17 世紀の武家歌壇の様相を具体的に示すことである。武家はどのように和歌を学んだのか、和歌を詠むために用いた歌書はどのようなものか、といった問題を明確にすることも目的とした。今年度まで、宮城県図書館伊達文庫・柿衞文庫・四国大学蔵凌霄文庫・島原図書館肥前松平文庫・今治市河野美術館等で調査を行い、大名が収集した歌書について調査を行った。ご協力頂いた各機関に、心より感謝申し上げる。

またこれらの歌書は、全国にどれくらいあるのか、所蔵している機関はどこなのか、類似した装丁を持つ本はあるのか、といった点を国文学研究資料館のマイクロフィルムで調査した。今年度は最終年度であるため、武家歌人が関わった連歌文芸についても調査を行った。3 年間の成果は次の通りである。

【2015 年度】

(1)　17 世紀の武家歌人を調査するにあたり、『正木のかつら』や『和歌視今集』の作者部類を活用し、重複して名前の挙がる武家

を整理した。同時代の撰集を照らし合わせ、近世前期に武家歌人と目されていた人々は誰かを把握した。

(2)　宮城県図書館伊達文庫を中心に、武家歌人の資料調査を行った。８月と３月の調査では近世初期の武家の歌会で用いられた組題に注目し、飛鳥井家と冷泉家が出題した歌題について明らかにした。その結果を「宮城県図書館蔵伊達文庫『組題　飛鳥井家』『組題　冷泉家』の翻刻と解説」（いわき明星大学研究紀要　人文学・社会科学・情報学篇、第１号、2016 年 3 月）としてまとめた。

(3)　(1)を踏まえ、17 世紀の武家歌人の交流について具体的に示した。「武家歌人と飛鳥井雅章―寛文・延宝期を中心に―」として、その成果を論文にまとめた（今年度中に掲載予定）。

(4)　17 世紀を代表する武家歌人、内藤義概の動向を知るため、交流のあった全国の俳諧好士の句を集めた『桜川』の注釈を行った。この成果を「桜川注釈（一）」（いわき明星大学大学院人文学研究科紀要、第 12 号、2016 年 3 月）としてまとめた。

(5)　近世以降に注目された『徒然草』が、17 世紀の大名の和歌・俳諧にどのように取り入れたか調査した。その成果を、「風虎発句考―『徒然草』との関わりを軸に―」と題し、１０月に行われた俳文学会全国大会で発表した。

【2016 年度】

(1)　17 世紀における武家歌人の和歌の指導者の１人に飛鳥井雅章がいる。雅章と関わりの深い武家歌人を調査しまとめた。

(2)　まとまった大名文庫とされる宮城県図書館の伊達文庫を調査した。伊達文庫には、飛鳥井家や雅章に関わる歌書が複数残されている。特に伊達吉村の蔵書とされる「璧」印のある歌書のうち、飛鳥井家と関わるものには共通の装丁がなされたものがあった。これらの歌書は飛鳥井家から吉村以前に伊達家に和歌指導の一環として伝えられたものと推測される。

(3)　(1) (2)の成果を受けて、伊達文庫にある『詠百首和歌』の翻刻を行い、「宮城県図書館蔵伊達文庫『詠百首和歌』の翻刻と解説」（「いわき明星大学 研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇」第 2 号、2017 年 2 月）としてまとめた。

(4)　新たな武家歌人資料として、四国大学凌霄文庫にて『綱通公詠草』『蜂須賀家の集』『飛鳥井家会始和歌』などの歌集を調査した。これも、飛鳥井家と関わりのある資料であることが判明した。

(5)　17 世紀を代表する武家歌人、内藤義概の動向を知るため、義概と近しい俳諧好士の句が多く入集する『桜川』の注釈を昨年に引き続き行った。この成果を「桜川注釈（二）」（「いわき明星大学大学院人文学研究科紀要」第 14 号、2017 年 3 月）としてまとめた。

【2017 年度】

(1)　28 年度に続き、17 世紀における武家歌人の指導者である飛鳥井雅章について調査しまとめた。また、武家歌人が行った連歌についても調査した。

(2)　宮城県図書館の伊達文庫・柿衞文庫・島原図書館の肥前松平文庫等を調査した。

(3)　(1) (2)の成果を受けて、柿衞文庫にある『寛永花壇千句』の翻刻を行い、「『寛永花壇千句』の翻刻と解説」（「いわき明星大学 研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇」第 3 号、2018 年 2 月）としてまとめた。また、武家の連歌資料をまとめた『連歌大観第三巻』(古典ライブラリー、2017 年)を出版した。

(4)　武家歌人資料として、島原肥前松平文庫にて『延宝三年二月十一日飛鳥井家会始』『延宝二年二月十六日飛鳥井家会始』などの歌会記録を調査した。

(5)　17 世紀を代表する武家歌人、内藤義概の動向を知るため、義概と近しい俳諧好士

の句が多く入集する『桜川』の注釈を昨年に引き続き行った。この成果を「桜川注釈（三）」（「いわき明星大学大学院人文学研究科紀要」第15号、2018年3月）としてまとめた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計8件）

(1) 吉田健一、松本麻子
『桜川』注釈（三）
「いわき明星大学大学院人文学研究科紀要
第15号」pp. 138～152
査読無　2018年3月
学術機関リポジトリアドレス
https://imu.repo.nii.ac.jp/

(2)松本麻子「柿衞文庫『寛永花壇千句』の翻刻と解説」
「いわき明星大学研究紀要　人文学・社会科学・情報学篇　第3号（通算31号）」
pp.1～26
査読無　2018年2月

(3) 松本麻子「『住吉法楽千句』の技」
「俳文学研究　第68号」pp.2～3
査読無　2017年10月

(4) 吉田健一、松本麻子
『桜川』注釈（二）
「いわき明星大学大学院人文学研究科紀要
第14号」pp.63～77
査読無　2017年3月
学術機関リポジトリアドレス
https://imu.repo.nii.ac.jp/

(5) 松本麻子「古典」となった『徒然草』
－一七世紀の俳諧を中心に－
「青山語文　第47号」pp.26～36
査読有　2017年3月

(6) 松本麻子「宮城県図書館蔵伊達文庫『詠百首和歌』の翻刻と解説」
「いわき明星大学研究紀要　人文学・社会科学・情報学篇　第2号（通算30号）」
pp.1～9
査読無　2017年2月

(7) 吉田健一、松本麻子『桜川』注釈（一）
「いわき明星大学大学院人文学研究科紀要
第13号」pp.61～76
査読無　2016年3月
学術機関リポジトリアドレス
https://imu.repo.nii.ac.jp/

(8) 松本麻子「宮城県図書館蔵伊達文庫『組題飛鳥井家』『組題冷泉家』の翻刻と解説」
「いわき明星大学研究紀要　人文学・社会科学・情報学篇　第1号（通算29号）」
pp.11～20
査読無　2016年3月

〔学会発表〕（計1件）

(1) 松本麻子「 風虎発句考 －『徒然草』との関わりを軸に－」
俳文学会大会、2015年10月

〔図書〕（計1件）

(1) 廣木一人、松本麻子編『連歌大観』
第三巻、古典ライブラリー、2017年、
総ページ700

６．研究組織

(1)研究代表者
松本　麻子（Matsumoto Asako）
いわき明星大学・教養学部・准教授
研究者番号：70708990

以上